
東京銀世界

温泉街

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京銀世界

【Nコード】

N0634F

【作者名】

温泉街

【あらすじ】

中部地方の片田舎に住む少年は高校3年生になり、大学受験への意識も高まった彼は遠い東京へ夢を託した。しかし、そこに戦争という暗い影が差し始める……。

桜の季節

序

車窓から、雪をかぶった富士山が見えた。2か月前とくらべると白い冠がだいぶ北上しているようだ。今日は晴天であった。沿線の玉川上水沿いには桜が咲き誇り、家族連れやカップルが楽しそうに歩いている。私はそんなものは見なくなかったので、向かい側の座席に移動した。昼下がりの急行は空いている。2か月前の早朝に乗ったすし詰め急行が嘘のようにガラガラだった。西練馬駅で電車を降りると、私は大学への道を歩き出した。オープンキャンパスも行っておらず、センター試験利用で受かったので行くのは今日が初めてである。南口を出ると桜並木がひろがっていた。玉川上水の桜よりは人通りもまばらだったが、私は慣れない松葉杖をつきながら、少し顔をしかめて歩きだした。

桜の花が嫌いだった。すぐに散ってしまうからとか、はかないからとか、散ったあと雨が降ると汚いといった野暮な理由ではない。とは言っても、花びらの掃除が面倒くさいとか直接的な理由でもない。

咲く時期が嫌なのだ。

総じて桜が咲くのは春だ。毎年春にはいいことがない。中学の入学式も、高校の入学式も、そして今年も……。桜の花は希望の象徴などと思なされることが多いが、片腹痛い。とにかく、なにか新しいことの「始まり」というものが、私にはひどく居心地が悪く、不快なものに感じられた。

「今年も咲いた・・・」

私はため息と一緒に言葉を吐き出した。明日から通うことになるだろう、武州大学桜川キャンパスの重厚な正門を見上げた。先月のプロシア軍戦闘機の機銃掃射でところどころ陥没しており、「州」

の字に弾がめりこんでいた。私にはそれが滑稽で、少し唇の端を歪めると踵を返した。

1年前 2013年 4月3日

「では、3年7組から順に退館してください」

生活指導の山下が珍しく簡潔に話を終えると、生徒に退出の指示を出した。7組の生徒が我先にと体育館を飛び出していく。6組も5組も、いつもなら気怠るそうに出ていくのだが、今日は違った。クラス替えごときでそんなに騒ぐなよ……。

私は小さく息をつくとき、4組退出の指示に従って外に出た。上履きに履き替えていると「3年はどんなクラスやるな」と、私の上から声が降ってきた。見上げると、同じクラスの伊崎康則いさきやすのり、通称ヤスが立っていた。いや、正確にはあと数分後には離れてしまうのだから。

「期待せんぼうがええな。2年のときよりいいってことはないやろ」

私は苦笑しながら答えた。ヤスも「確かに」と言っただけで少し笑う。2年のときはなかなか居心地の良いクラスであった。あれを超えるクラスに巡り合うことはもうないだろう。

後ろから来た2年の生徒が物凄いスピードで校舎へ駆けて行った。私たちは並んでゆっくりと歩いた。

「なあ、ナツは大学どこ受ける？」

唐突にヤスが口を開いた。

「ああ、もう3年やもんな。僕は……東京行けたらいいかな……。ヤスは？」

ちなみに男子高校生で頭の中限定ではあるが、『私』などという

一人称を使うのは私くらいのもだろう。もうすっかり慣れたが。

「俺は三河行けたらいいや」
みかわ

ヤスがしたり顔で応える。謙虚なものだ。しかし、漠然と東京へ行きたいと思っている私に比べれば現実的で賢い選択と言える。私にしても、特に東京に憧憬や夢を描いているわけではない。地元の手頃な大学がないだけだ。

どこからか飛んできた桜の花びらが、私の鼻に貼りついた。私はそれを大きなため息で吹き飛ばした。三重県南部にある私の故郷の桜は、もうあらかた散ってしまっていた。

クラス表の前にできた人ばかりを遠巻きにして目を凝らすと、私の新しいクラスは5組のようだ。無情なことに男子で2年のときと同じクラスなのは吉川だけだったが、いないよりは心強い。5組へ行き、そこで初めてクラスの面々を知ることができる。1年のとき仲の良かった奴らや、同じクラスになったことはないが、2年のときに隣のクラスでよくしゃべる奴らが多かったので、とりあえずは安心だ。それに席も後ろから2番目と幸先がいい。前の席が話したことのないチャラ男の様相を呈している奴だったが、私がぶち負けたペンケースの中身を拾ってくれたので悪い奴ではないだろう。

「はい、じゃあ今日はこれで終わります」

提出物を揃え終えた新しい担任、北島がずれたネクタイを直しながら、のんびりとした口調で言った。40代後半の落ち着いた教諭で、確か2年のときは6組の担任だった。どちらかというとアタリの部類に入るだろう。

「どう？ 新しいクラス」

となりを歩いていった枡岡くんが、頭頂部に載った桜の花びらを指でつまみながら聞いた。駅へは桜並木の中を歩く。いつもは自転車通学だが、今日は遅刻しそうだったのでだったので列車で来た。

「微妙……。1年のときよりはマシかな。枡岡くんは？」

「まあ可もなく不可もなく……。女子が多い」

枅岡くんが苦笑を浮かべながら言った。

「ああ……。そうだ。西田と一緒にになった」と私が言うと、「うわ」と枅岡くんが眉をひそめて笑った。西田はちょっとした問題児であるが、愛すべきバカといった感じで、嫌われているわけではない。

「あー……。きれいやなあ……」

枅岡くんが嬉しそうに桜を見上げた。私は「そうやね」と言った。思わず一緒に吐き出したかすかな溜息は彼には聞こえなかったように、私は少し安堵した。

北欧の大国であるプロシアが北海道の礼文・利尻両島に侵攻したのは、その夜のことである。

来客者

翌朝は父親の喚き声で目が覚めた。彼は少々声が大きすぎる。私は、今日も学校か、と寝起き早々ため息をつき、身体を起こした。平日の目覚めは本当に気が重い。私が部屋の向かいの洗面所で顔を洗っているときも、父親の喚き声は続いていた。これがうるさく感じるのはこの家が狭いマンションだからということもあるだろう。

2LDKで、私の部屋は物置兼用。

リビングダイニング、というにはあまりには小さい空間だが、いつも食事を摂る場所に行くと、父が興奮した面持ちでテレビをみていた。

「あ、夏乃^{なつの}。おはよう」

「う」

挨拶はちゃんとする。私の朝の挨拶はたいてい頷くだけか、「う」か「あ」である。

「すごいことになつとるで」

父がテレビを指して言った。アナウンサーが緊張した面持ちで喋っている。

『繰り返しお伝えしております。昨夜未明、北海道の利尻島・礼文島でプロシア軍のものと見られる輸送機8機が無許可で島の空港に強行着陸しました。現在、両島との通信は途絶しており、スクランブル発進した日本空軍の偵察ヘリが威嚇射撃を受けました。ヘリに乗っていた隊員にケガはなく、プロシア軍と思われる占拠集団からの無線によると、島の半径30キロ以内に侵入した船舶及び航空機は、これ以降無警告に撃沈・撃墜するという警告を受けました。島との通信が途絶していることから、両島はプロシア軍に制圧された可能性が強いという見方が出ています。また、稚内から両島へのフェリーは始発便から欠航しており……』

私は呆然とテレビの前で立ち尽くした。日本が……侵略されて

いる？ もう何十年も戦火の飛んだことのない日本が・・・。

「な？　すごいやろ？」

父がなぜか嬉しそうに聞いた。昔はお祭りとか台風で学校が休みになるとはしゃぎ回る子供だったに違いない。もっとも私も若干その気がある。

「あんたなに喜んだの？」

母がたしなめた。こっちはいたって真剣にテレビを見ている。そのせいかまだ朝食の準備ができていないようだ。とはいえ、私も他人事ではないのでテレビに見入るが、結局それ以上の情報は得られず、学校へ行く時間となった。

私の高校はいま住んでいる南勢市の隣、北熊野町にある。運のいいことに私たちが入学すると同時に新校舎が完成し、以前のクソボロい校舎に比べて気持ち良く勉学に励むことができるのだ。もっとも、私を含むほとんどの者がこんなことは毛頭思っていないだろう。

自転車で井戸川にかかる小さな橋を渡っていく。春のこの時期は本当に気持ちがいい。私は澄んだ川の水とその周囲一面に広がる田園風景を眺めながらゆっくりと自転車を漕ぐ。この通学路が嫌いではなかった。学校まで40分かかるのだが。

そんなことを考えていると、後ろから私を呼ぶ怒鳴り声が聞こえた。幼馴染みの水野和紀だ。自転車に猛スピードで漕ぎながら私に接近してくると、幅よせをしてきた。

「よう朝からそんなでかい声が出るな」と、私が彼の肩をひつつかみながら言う。

「相変わらずテンション低いな」

和紀は笑いながら言う、「朝のニュース見た？」と聞いてきた。「見た！　大事件やな」と私が答える。「めんどくさいことにならないといいんやけど・・・」

「ん？　どういうこと？」　和紀が聞いた。

「だって今年俺ら受験やん。徴兵とか・・・されたら嫌やなあって」

「はあ？ そんな戦前戦中やあるまいし！ 国家総動員法かよ。おまえは相変わらず気が小さいな」と言って和紀は笑い飛ばした。「冗談やわ」と私も彼の自転車の前輪を蹴とばす。

学校まではあと30分ほどだ。

学校でもこのニュースでもちきりだった。問題児の西田が、「日本侵略されるんかなー」とはしゃいでいる。こいつは自分の将来を真面目に考えたことがあるのだろうか。1限目が終わり、トイレから帰ってくると吉川の周りに人が集まっていた。どうやらワンセグでニュースを見ているらしい。私もその輪に入れてもらった。新しい情報が入ってきたようだ。

『さきほど入ってきた情報によりますと、礼文、利尻両島から、北海道のNHK・声問放送局こえとくへ連絡がありました。プロシア軍空軍大佐を名乗る男から、2時間以内に両島にテレビ機材をへりて運ぶよう指示がありました。なお、島民の安否を確認したところ、全員が無事で、死傷者はいないとのこと。繰り返します。さきほど入ってきた・・・』

「テレビパフォーマンズでもするんか」

吉川が言った。それしか考えられない。チャイムがなったので、各々が自分の席に戻っていく。彼も古文の辰野たつのの授業でワンセグを見るのは無謀と思ったらしく、大人しく携帯をしまった。

『日本国民諸君。私はプロシア空軍ケーニヒスベルク基地所属、フェードル・バジンスキー大佐である』

昼休み、私は再び吉川を囲む人だかりにいた。小さな画面には軍服を着た、いかつい体軀たいくをした初老の男が映っている。日本語は上手いが、聞きなれないカタカナ語に気圧された。背景は礼文島の香深フェリーターミナルだ。

『我らは利尻・礼文両島を制圧した。だが安心してほしい。島民には一切危害を加えていないし、加えるつもりもない。もちろん我らとて無意味にこの島を占拠したわけではない。諸君らは覚えているだろうか。一昨年5月、わが国の国籍を持つ者3名が成田空港で拘束された。彼らはヘロインの密輸という謂われのない罪を着せられ、日本の監獄に入れられたのだ。我々は彼らの引き渡しを望んでいる』

私は息を呑んだ。あの事件は覚えている。プロシア国籍の者がヘロインとトカレフを密輸したとして逮捕された。だがあの3人は腹の中に、分解したトカレフとヘロインを溜め込んでいたはずだ。謂われのないわけがない。さらにそのうち一人が拳銃を乱射し、二人ほど重症を負っていたはずだ。その後、その男だけが自殺した。

『一人の同胞の死は家族の死も同然である』

「こんな言いがかりやろ・・・」

隣で見ていた橋倉くんが信じられないといった顔でつぶやいた。

「え？ なに？ なんなん？」と、西田は事件を知らないようだ。

男は最後に付け加えた。

『彼ら2名を24時間以内に釈放しない場合、我々は本土に侵攻する』

葉桜

ドアを開けると、春の終わりにしては強すぎる日射しが降り注いでいた。半袖でもいいくらいだ。夏嫌いの私は内心舌打ちをして、パーカーの袖を少しまくり上げる。まったく、夏生まれで名前にも夏が入っているのに夏嫌いとはこれいかに。2週間前にははすでに散り始めていた桜は、とうの昔に葉桜になっていた。今度は毛虫の季節が来る。最悪だ。

今日から熊野市にある大手塾に通う。英語が苦手なので、それを2タイムとった。最寄駅から混んだ普通列車に乗り込む。30分ほどで熊野駅に着いた。塾には高2の3学期から通っているので勝手知ったるものであったが、初日ともなると多少緊張する。私は時間割を確認し、D棟の5階の教室に入った。この塾の建物はあとから建て増しをしたのか、非常に入り組んでいた。初めて来たときには迷ったものだ。

生徒はまだまばらだった。それでも熱心な何人かは一番前に陣取っている。この授業の講師はかなりの人気のようだ。始まるまで暇なので第1講のさわりの部分を読む。それも飽きてきたので、携帯でニュースを見た。

あれから結局、日本側は「彼らの要求を呑むことは、悪に屈することである。我々はこのような不当な領土占拠は断じて許さない」と啖呵を切ってしまい、プロシア軍を激昂させた。プロシア軍は3日前、北海道最北部の宗谷市に侵攻。さらには日本最北端の島、亜^あ庭島^{にわじま}に侵攻した。奇跡的なのか、はたまた彼らのはからいなのか、民間人の死傷者は一人も出ていない。もつとも、侵攻前にプロシア軍輸送機が予告ビラをばら撒いていたので、街に残っている者はほとんどいなかった。

講師が入室したので、私は携帯をしまった。30代後半の男であ

る。すでに教室は7割方埋まっていた。実際、この高井と名乗る講師の教え方はかなりわかりやすく、楽しいとすら思えた。英語を勉強していてこんなふうに思ったのは初めてだ。文法問題なのも関係しているのかもしれない。

昼食をはさんで次の長文の授業を受けた後、家路についた。

日曜日の昼。父は休日出勤、外出の多い母はどこか用事と言っていたが、聞いていなかった。私は茹でたパスタを食べながらネットをやっていた。早慶やマーチを目指している奴はいまごろ勉強しているのだろうか、などと思いながら、ある動画共有サイトでエロゲーのプレイ動画をニタニタ笑いながらを見ていた。こんなときでないと見れる機会がない。

インターホンが鳴った。私は柄にもなく一瞬だけ身体を硬直させ、ウインドウを消すと受話機を取った。

「あ、なっちゃん？ あたし」

「ああ、あんたか……。なんなん？」

同じマンションに住む幼馴染みの高村智香だ。たかむらちか確か私よりひとつ下で、進級できたならこの春高校2年生になったはずだ。

「ちよつと、はよ開けてよ。せつかく余ったおかず持ってきたつたのに」

なに？ パスター品の私にはありがたい話だ。玄関へ行つてドアを開ける。皿にてんこ盛りになった餃子を持った智香が立っていた。

「あんた、それ作りすぎやろ……」

「あれ？ なっちゃん今お父さんとお母さんおらんの？ うちも誰もおらんで暇やからちよつと上がつてくわ」

智香は私を押しのと靴を脱いで私の部屋に上がっていく。そういえばこいつは以前、家の近くで火事が起きたときも自分の家がある3階じゃ見えないとか言つて妹の純香すみかを引き連れてうちまで見に来た覚えがある。「おい、待て！」 ウインドウを消しておいて

良かったと心から思った。

「もう、こんな行儀の悪い食い方しとったらあかんやろ！」

智香がパソコンの前のパスタを指さす。

「はいはい、すんませんね」 私はパスタの皿を持ってリビングに移動する。

「なつちゃん、ちゃんと勉強しとるんやね……。そっか来年はもう大学生かあ」

智香が私の勉強机に広げられた英語の参考書を見ながら呟いた。

「……ちーちゃん、寂しいんやろ」

私が下卑た笑みを浮かべながら智香の顔を覗きこむ。グーで殴られた。

智香は2時間もDSに興じたあと帰って行った。彼女のマリオカートにだけは敵わない。さて、お楽しみ続きを見るか。再生ボタンを押した。ふと、流れてきた画面の上に表示されているニュースに目が留まった。

『プロシア軍、初山別基地を空襲』
しゅさんべつ

私はエロゲそっちのけで、すぐにそれを開いた。

『昨夜未明、プロシア軍爆撃機4機と戦闘機6機が北海道初山別基地を空爆。重軽傷者12名が病院に運ばれた。このうち3名は意識不明の重体で、3時間後に初山別基地職員、森田春江さん(52)が息を引き取った。プロシア軍機が利尻空港を離陸した時点で、日本空軍 興部飛行場の戦闘機3機がスクランブル発進し、これを2機撃墜したが、プロシア軍機により日本軍機撃墜される。現在パラシュートで脱出したパイロットの捜索を行っているが、一人の行方がわからなくなっている。』

首相は「ついに国民に死者が出てしまった。プロシア軍のやって

いることは侵略となんら変わらない。こうなつた以上、我々は徹底抗戦を呼びかける所存である」と述べた』

いままで占拠するだけであつたプロシア軍が、ついに直接的な攻撃に出た。常道的な軍事施設の破壊である。

「これやばいんじゃないか・・・」

私はひとり呟いて、窓の外を見た。自宅マンションから自転車で30分ほどのところに、日本海軍南勢工廠がある。1週間前からドック入りしている重巡洋艦の黒い影が、ここからでも見えた。

プロシアの憂鬱

眼下に雪をいただく山が見えた。おそらくあれが中部地方の最も西に位置する北アルプスと言われているものだろう。ヨーロツパのアルプスに比べればなんと矮小でいびつな山々だろう。操縦棹を握りながら、フランツ・アドラーはそんなことを考えていた。目標となる南勢工廠まではあと500キロほどだ。亜庭島の飛行場を離陸してからかれこれ4時間になるだろうか。さすがに疲れてきた。

「ジェット機ならすぐなんですけどね」

フランツの疲労を察したように、隣に座っている副操縦士のフェリクス・ベルム少佐が声をかけてきた。いま彼らが操縦しているのは4発の重爆撃機だ。

「いや、あれはまだ公に使うときじゃないな」

フランツが苦笑する。ヘルシンキ会議で禁止されていたものの、そんなものを端から守る気のなかったプロシア軍はジェット戦闘機や誘導弾の製造を続けていたが、東北を完全に陥落させてから戦線に投入することだった。それでも、長距離爆撃機や戦闘機には小型の空対空誘導弾や自動照準の機関砲が備え付けられていた。

「しかしまさか俺たちが駆り出されるとは思わなかったよ……」
フランツがため息をついた。

「それ私もずっと気になっていました。なんで精鋭の第一旅団じゃなくて我々第四旅団なんでしょうかね。やっぱり……」

フェリクスが言い淀む。

「ああ。精鋭を無駄に死なせたくないんだろ」
フランツが吐き捨てた。操縦席に重い空気が垂れこめる。

「とりあえず、俺たちの出番は日本が降伏するまでだ」

フランツは乱暴な言葉を発しながらも、内心は弱気だった。はるばるヨーロツパからなぜこのような極東の小国を侵略する必要があるのか、皆目見当がつかなかった。昨年娘が生まれた妻のマリアと

家族のためにも今はできるだけ本国を離れなくなかったし、当たり前の話だが、彼は戦争が嫌いだった。フランツはプロシアを守りたいと思ったから空軍に入った。かつてソ連に蹂躪されていたときのような屈辱を、二度と国民に味わわせないために戦おうと思った。それが極東の小国を侵略し、今現在は日本の三工県とかいうところにあるナンセイ工廠を爆撃せよとの命で操縦棒を握っている。フランツとフェリックスの所属する第四旅団の駐留任期は来年の2月までだ。それまであと8カ月もあった。

妻のマリアはフランツの仕事熱心さを心配している節があったし、彼の寡黙さも見かねて常々「誰か同僚か友達でもうちに読んだら？」などと言っていた。フランツの勤務態度は極めて真面目であつたし、夜もふらふら遊ぶということはなく、仕事が終わるとまっすぐ帰宅していた。それが家族のためだと思っていたし、第一娯楽などに使う余計な金は持ち合わせていない。

「なあ、少佐もケーニヒスベルグの出身だったよな？ それで確か独身だ」

フランツは隣で寒そうに肩をすくめているフェリックスに尋ねた。彼は少し眉をひそめた。

「ええ、そうです。よく知ってますね。・・・あれ、そういえば中佐もケーニヒスベルグでしたよね？」

「うん。・・・この仕事が終わったら、うちに飯でも食いにこないか？ マリアの料理の腕はなかなかのもんだぜ」

フランツは数分前までは考えてもいなかったことを口走っていたが、これは名案だと思った。きっとマリアは喜ぶだろうし、安心して違いなかった。

フェリックスは「楽しみにしてます」と微笑を浮かべた。もちろん「生きて帰れたらですが」と笑いながら付け加えるのも忘れなかった。

「1368年、朱元璋が明を建国し、洪武帝を名乗り・・・」

私は世界史の山下のやる気のない声を聞きながらも、ノートはしつかりとっていた。世界史はもとも好きであつたし、覚えれば点数が上がるいいカモだ。落とす手はない。先ほどの英語の時間に騒ぎまくっていた西田は机に突つ伏して寝ていた。こいつは推薦で適当な大学に入るのだろう。

私はペンを置き、窓の外に目をやった。ゴールデンウィークも終わり、そろそろ学園最寄駅の植え込みのツツジが咲き始める季節だ。先月までは教室を埋めていた制服の紺色は、いまや合服や夏服の白色に押されつつあつた。今日は予報では今年初めての夏日らしく、生徒たちは専ら夏服であつた。暑さに弱い私もこの時期にはまだ珍しい開襟シャツである。

先月下旬、プロシア軍は北海道を制圧した。各地の日本軍基地では激しい戦闘があり、両軍とも死傷者が続出した。襟裳岬に近い浦河基地は、プロシア軍の戦艦と巡洋艦によつて艦砲射撃で無力化され、札幌に近い江別基地は空爆により使用不能となつた。2011年に締結されたヘルシンキ軍縮条約はかなり大規模かつ本格的なもので、軍用機のジェットエンジン搭載、ロケット兵器の使用が禁止となつた。おかげで軍事技術は大戦前に逆戻りし、一昨年在日米軍が完全に撤退した日本も、艦載戦闘機や4発爆撃機などの製造を開始した。それはもちろん、プロシア軍も同じことだったが、日本軍を制圧することなど赤子の手をひねるようなものだろう。

私は考え事を中断し、教壇でしゃべり続ける山下を眺めた。この教師は急に生徒のウケ狙いに走るから気に入らない。話を広げやすいからなのか、西田や広野、4組の石田などがよく指名される。まれに和紀も当たることがあるので、そのせいか授業も遅れ気味だ。3年の5月で朱元璋はありえない。2学期の終わりまでに冷戦終結に漕ぎつけるのは至難の業だ。当てるならあんなアホ共じゃなくて、世界史マスターの私に聞くがいい。そんなことを考えながら山下を睨みつけていると、目があつた。

「えーじゃあ次のカッコを・・・涼波」

どうやら出席番号順で指名されていたらしい。いきなり私が指されることはあり得ない。　「・・・え・・・あ！」

私は急に指されて、慌ててプリントに目を落とした。

「ごめん、どこだっけ？」

隣に座っている4組の女子に問題を聞いて、「魚鱗図冊」と答えようとした刹那、すさまじい轟音が教室一帯に響き渡り、窓ガラスがビリビリと震えた。何人かの女子生徒がけたたましい悲鳴をあげ、首を縮める。続いて航空機のレシプロエンジンの音が小さく聞こえた。

「おい、あれ・・・」

和紀が目を見開き、窓の外を指さした。丘の上に立つこの高校から、港の方はよく見える。晴れ渡った空には、およそ似つかわしくない黒煙と火を吹いているのは南勢工廠だ。そのはるか上を、プロシアの長距離爆撃機が高度を上げ、編隊を組んで悠然と飛び去っていく。時折高射砲の音らしきものも聞こえるが、高度数千メートルを飛んでいる爆撃機には掠りもしないようだった。

「落ち着け！　ここがやられてるわけじゃない！」

山下が良く通る声を張り上げ、生徒たちをいさめる。なんだ、やればできるじゃないか。私は一瞬だけそんなことを思ったが、いまはそれどころではない。あの爆撃の下ではいま、何人もの人が恐怖にかられて逃げ惑っているに違いなかった。

「これが“自衛”かよ・・・」　私は奥歯をかみしめると、北の方角へ遠ざかっていくプロシア軍機を睨みつけた。

何十分も薄暗いベッドの上でうつ伏せて文字を書いていたので、目が疲れてしまった。清水秋雄は目頭を押さえながらベッドの上で胡坐をかいた。巡洋艦の狭い二段ベッドなので、胡坐をかいただけ

で天井に頭がつかえてしまう。今日は夕方の対空戦闘訓練まで休みが与えられていた。少し外の空気が吸いたくなつたので、秋雄は甲板に出てみた。もう見飽きているはずの海も、今日は初夏の陽光をキラキラと反射して格段に美しい。

秋雄は南勢市の中学を卒業した後、すぐに海軍に入隊した。特別な愛国心を持っていたわけではなかった。彼の父は天逝し、家は貧しく、食べるものにさえ困ることが多かった。なので彼は義務教育を終えたらすぐに職に就こうと決めていた。父が死んでから女手ひとつで育て上げてくれた母を守りたい、と強く思い、軍に入った。とは言え体力だけには自身のある秋雄は、毎日の訓練に耐えればいいだけで、このご時世に戦争をおつ始めることなどないだろうと思っていた。その矢先、プロシアの侵攻が始まった。北海道と東北がほぼ制圧された今、この軍港もいつ攻撃を受けてもおかしくなかった。

この街だけは壊されなくなかった。沖合から見る紀伊山地の山々は海のすぐ傍までせり出し、この小さな湾を囲むように形成されている。秋雄はこの寂れた漁港もその傍らに併設されている軍港もひつくるめて好きだった。生まれたときから十数年見続けて来た景色も、沖合から見るのは新鮮だった。今日の訓練が滞りなく終われば、明日朝には上陸許可が降りるだろう。彼の乗務している巡洋艦は第8機動艦隊に属しており、普段は高知の海部軍港に常駐している。しかしプロシア軍の南下が懸念されるため、その護衛で南勢工廠沖に停留していた。なので秋雄にとつては思いがけない帰省となつた。明日上陸したら家に帰ろう。母は驚くに違いない。その後は夏乃に会いに行くのもいい。運動神経のないあいつは海軍の訓練の話をただだけで眉をひそめる。それが秋雄には面白かった。

突如、耳障りなサイレン音が甲板に鳴り響いた。秋雄は焦って腕時計を見るが、まだ昼過ぎだ。訝しむ彼はスピーカーからのアナウンスを聞いて愕然とした。俄かに慌ただしくなつた艦内を駆け、自分の持ち場である左舷の機銃座へ走つた。全長200メートル弱あ

る巡洋艦は、幾層にも武装が施されて走りづらい。彼は機銃座に飛び込むと、すぐに東の方角へ銃を向けた。乗組員の誰もが今までにない緊張した顔つきになっている。それが訓練ではないことを物語っていた。後部飛行甲板からは警報発令から十分も経たぬうちに水上戦闘機が発艦し、東の空へ飛び去ってゆく。その音が遠ざかっていったあとは、不気味なほどの静寂が辺りを支配した。

静寂の中、彼の耳が微かな重低音をとらえた。それは他の乗員も同じらしく、彼の隣りに伏せている同僚の斉藤が秋雄の方を見た。

「き、来たか……？」と斉藤が言うのと同時に腹を揺さぶる轟音が響き渡った。それが自分が乗っている巡洋艦の対空砲の音だと気づくまで、少し時間がかかった。今まで空砲しか聞いたことがなかった。それが秋雄の頭を揺さぶる。これは戦争なんだ……。隣に座っている斉藤が何か叫んだ。秋雄が我に返ったときには、もう銀色の戦闘機が数百メートルというところまで肉迫していた。慌てて彼は斉藤が方角を合わせた機銃の引き金をひく。ぱぱぱっ、という音と軽すぎる振動が手に伝わり、弾が発射されるが、当たっているか否かなどわかるはずもない。いや、巡洋艦で一番射程距離の短い機銃など当たるほうが珍しい。戦闘機に向かってマシンガンを撃っているのと同じだ。

引き金を引きながら、秋雄は確かに見た。戦闘機の下に取り付けられていた筒状のものが海に落ち、真っ直ぐな白い筋を海面に引きながら巡洋艦に向かってくるのを。頭上を掠めた戦闘機の翼の下に描かれているプロシアの国旗を。

その刹那だった。頭蓋骨を内側から殴られたような衝撃と痛みが彼を襲い、爆風で機銃座から吹き飛ばされ、艦橋の根元に頭をひどく打ちつけた。初めて命の危険を感じた。斉藤は……どこへ飛ばされたんだ……。辺りを見渡すと、鉄片が胸に突き刺さっている斉藤の姿があった。秋雄は息を呑む。今の彼の思考では、友人の死を悲しむことができなかった。戦わなければ……やらなければこっちがやられる……。秋雄は這って機銃座に戻り、再び真

つ直ぐにこちらに向かつてくる銀色の飛翔体に、額から溢れる血を拭い、照準を合わせて引き金をひいた。自分の発射した弾なのか、はたまた対空砲の散弾が命中したのか、戦闘機の下部に取り付けられていた魚雷が発射前に誘爆し、機体がばらばらに吹き飛んだ。数千口先にある軍港からも黒い煙が上がっている。街も攻撃を受けているだろうか……。夏乃は……。彼は半ば夢ともうつともつかなくなつた頭で考えた。霞む目を細めながら、再び機銃のグリップを握る。耳をつんざくような大きな爆発音が轟いた。数百メートル離れたところに停泊していた駆逐艦が真つ二つに折れ、あつという間に沈んでいく。着底した戦艦に爆弾や魚雷が雨のように叩きつけられ、砲塔が誘爆を起こす。海に飛び込んだ海兵たちにプロシア軍機が機銃掃射を浴びせる。水柱が規則正しく2列に並んだ。

弾雨の中を巡洋艦に向かつて突っ込んで来た小型爆撃機の右翼が根元から吹き飛び、海に落ちる。歓喜の声を上げる間もなかった。彼は見ただろうか。遙か上空から急降下してくる戦闘機と、そこから切り離された楕円形をした鉄の塊を。それが艦橋を直撃すると、主砲に詰まっていた弾薬が誘爆を起こした。秋雄は顔がちぎれるような爆風を浴びながら、最後に母に宛てた書きかけの手紙のことを思った。

梅雨空

梅雨の中休みの晴れの日だというのに、うだるように暑かった。

気温は30 あるかないかだが、湿度が高く、20分も自転車漕いでいる私は汗みずくである。学校へ着く前からこれだと嫌になる。プロシア軍はついに本州の主要基地や工廠を攻撃し始めた。輸送網の鉄道や高速道路もいつ破壊されてもおかしくない。この三重の田舎も例外ではなかった。一般市民の殺戮や主要都市への絨毯爆撃はないものの、先日南勢軍港爆撃を受けて、市民のあいだには防空壕を掘ったり、食糧や貴重品を埋めたりする動きがみられている。NHKのニュースでは、耐火金庫が売り切れて生産が追いつかないということだった。近隣の小中学校や高校でも防空壕の設置が始まっていた。日本空軍は数十機のプロシア戦闘機を撃墜したらしいが、彼らの侵攻を食い止める役には立っていない。なんでもプロシア戦闘機には誘導弾がついているらしい。明らかに軍縮条約違反だ。北海道や東北の海軍基地も制圧され、プロシアの小山のような軍艦が停泊していると聞いた。

チャイムが鳴っても北島が姿を現さないので、吉川や藤谷と喋っていた。藤谷は2年のときから時々話す程度だったが、3年になって結構仲良くなった。大体いつもは吉川、藤谷、橋倉さんと、秀才だがクラスでは若干嫌われ気味の出口と一緒にいた。

5分ほど遅れて入ってきたのは北島ではなく、物理の大橋だった。この教師は要領が悪いことで有名であり、生徒からかなり煙たがられている。大橋の手には紙の束が握られていた。先月に受けたマーク模試の結果だろう。

「はい、じゃあ名前を呼ぶんで、取りに来てください」

私は自分の名前が呼ばれると大橋から紙を受け取り、すぐに結果を見た。国・英・世界史の総合偏差値は50.8。第一志望、成蹊

大学文学部、E判定。まあ予想していたことだ。いきなりA判定をとれるとは思っていない。それに第2志望の文教大学教育学部はC判定ではないか。最初でこれなら上出来だ。私は自分にそう言い聞かせた。吉川や出口が覗き込んできて「すごいな」「やるねえ」と言われ、私はくすぐったかった。それでも出口は総合偏差値63で、私の第一志望を書いたとしたら余裕でA判定なのだが。

「暑つついなあ・・・」

吉田くんがゴルフボールを拾いながらうんざりした調子で額を拭った。彼は1年のとき同じクラスで、2年生のときは隣のクラスだった。だが、晴れて今年と同じクラスとあいなった。それはさておき、体育で初めてゴルフというものをやってみたのだが、なかなか面白い。パターの短距離でも空中に上げて打たなければならず、転がしてしまふと先生に「涼波、玉入れとちゃうぞ！」と笑われた。

「ああ・・・夏が一番嫌いや。消えたらええのに」 私は自分がゴルフ用の皮手袋をしていることに気づき、それをむしり取る。「名前は夏乃やのにな」と言って吉田くんは笑った。彼は関西の公立大学志望しており、受験科目数も私立の私の3科目と比べ、9科目と多い。数学と理科が全くできなかった私は、2年のときから私立に行くつもりだった。

枡岡くんと昨日見たドラマの主題歌を歌っている女性歌手がオカマに見える、という話題をケタケタ笑いながら話していると、かすかだが耳に響く不快な重低音が聞こえ始めた。私と吉田くん、近くにいた枡岡くんがほぼ同時に空を見上げる。東の空に長距離爆撃機が3機飛んでいた。尾翼にはプロシアの国旗が描かれている。女子が悲鳴を上げて体育館の方へ全速力で走っていった。いまあいつらと50メートル走したら負けるかもしれない。

数は3機だが、1機ずつがレシプロエンジンを6発搭載しており、おそろしくでかい。航続距離はジャンボジェット機並みだろう。

「でっかいな・・・」

体育教師の甲斐がいつのまにか横に来て空を見上げていた。

「国連はフランスの内戦にかかりきりで、全くあてになりません。いま我々が武器をとって戦わなければ、この国は乗っ取られてしまふ！ そんな状況でよくあなた方はそんな楽観的な考えができますね！ とても道民のことを慮っているとは思えません。それに彼らは自ら締結したヘルシンキ条約に違反している。これはまぎれもない事実です！」

テレビの討論番組で北海道出身の国会議員が口角泡を飛ばしていた。北海道占拠後、ソ連軍は青函トンネルと道内すべての港を封鎖し、道民は北海道に閉じ込められている状態となった。テレビでは道内の放送局からの中継が流れることがあるが、一般市民への無差別な暴力行為はいまのところ起きていないとのことであつたし、あのバジンスキーとかいう将校は自らテレビで「市民が我々に反抗したり、非協力的な態度を取らない限り、危害は加えない」と述べていた。基地空襲は攻撃ではなく防御、とかのたまっていたような気がする。

「我々も早くロケット砲やミサイルを導入すべきだ！ 70年前の兵器でプロシアに太刀打ちできるはずがない。次はこの基地が南勢軍港の第8機動艦隊のような目に遭うか……」

私は目を見開いた。今、第8と言った……？ いや、第8は今四国に停泊しているはずだ……。去年の暮れに、帰省してきた中学時代の友人である清水秋雄に会ったとき、そう聞いた。来年の冬までは高知にいます。テレビに詰め寄ったが、出演者はそれについてはいもう言及しなかった。私はパソコンを立ち上げ、先日の南勢基地爆撃について調べてみたが、情報が統制されているのか、「巡洋艦2隻と、駆逐艦5隻が爆撃と雷撃を受け沈没」とだけあり、詳しいことは載っていなかった。

変な胸騒ぎがする。私はリビングの電話を取ると、少しの躊躇のあと、秋雄の家へかけた。長いコールののち、彼の母の声が聞こえ

てきた。とても疲れ切った声だった。私は挨拶をして自分の名前を告げる。秋雄の母は「ああ、夏乃くん」と懐かしそうな声を上げる。私はすぐに本題に入った。

「あの、秋雄の所属する第8機動艦隊が、南勢工廠で爆撃を受けたと聞いたんですが……」

秋雄の母が息を呑むのがわかった。最も触れてほしくない話題らしい。

「……実は、プロシアを迎撃するために高知から戻ってきて、沖に停泊していたらしいんだけど、そこを爆撃されたみたいで……行方不明者を搜索してるけど、まだ見つかっていないって……」

最後はほとんど涙交じりになっていた。

「なんなの？ あの子がなにしたんよ！ だから軍隊なんか入るのやめときって言ったのに……！」

私は返す言葉もなく、受話器を握って呆然と立ち尽くした。私の母の怪訝そうな視線だけを感じていた。

盛夏

暦の上では秋になったはずだが、当然のように暑い。夏休みが始まったばかりなのだから、当たり前だ。8月の頭に行われた第二回マーク模試はなかなかの出来だと思ったのだが、偏差値はわずか0.2上がったただだった。下がるよりマシか。私は自分にそう言い聞かせて、結果表を見た。国語の現代文と世界史は偏差値60近くに達しているが、英語と古文がひどい。偏差値45を少し超えているだけだ。

藤谷は英語の試験で適当にマークしたら、200点満点で120点を超えたいらしい。なんという強運の持ち主だろうか。しかし本番でそれが発揮できなければ意味がない。

学校の図書館は空いていた。夏休みだから当たり前だ。同じクラスの子二人が仲良く勉強している他には、人の姿は見えない。私は結果表を鞆にしまった。いつまでも睨めっこしていても埒が明かない。とりあえず目下の目標は英語をなんとかすることだ。塾のテキストを広げる。

「おい」 頭を小突かれた。

振り返ると、ショートカットに意志の強そうなきりりとした眉、姉に似てくりつとした丸い眼をした小柄な女の子が憎たらしい笑みを浮かべて立っていた。高村智香の妹、高村純香だ。たかむらすみか顔はいいのだが、いかんせん姉を凌ぐ口の悪さだ。

「あんた、先輩に向かってその口の利き方はなんや」

「先輩？ ああ、そういえばそうやね」

純香は本当にいま気付いた、というような調子で言った。

「なっちゃん、受験生やで夏休みも図書館で勉強しとるかなと思つて来たらほんまにおつた」

「まあ、やらない受からんでな」 私は苦笑しながら言う。純香は私の隣に座り、英語の長文を覗き込んだ。

「純香はなんで今日学校におんの？」

「あたし今日部活やったでさ」　そういえばこいつは中学の時から吹奏楽部だったはずだ。中学の「三年生を送る会」で、まだ当中一だった純香たち吹奏楽部の演奏を聴いたが、なかなかの腕前であつた。小学生までピアノを習っていたが全く上達しなかつた私から見れば、なにかひとつでも楽器ができるのは十二分に胸を張れることだと思う。

「ほんでな、なっちゃん今日自転車やろ？　帰り家まで乗せてつてよ。勉強終わってからでええから」

数秒前まで抱いていた純香に対するほんのわずかな尊敬の念が瓦解した。

「……おまえ、定期は？」

「昨日で切れた。今日は普通に切符買つて学校まで来たら、帰りの電車賃ないことに気付いた。姉ちゃんに聞いたら多分図書館にあるよつて言うて来てみたらほんまにおつた！　あんたら付き合つてるんか？」

へらへら笑っているなら鼻の穴に指でも突っ込んでやろうと思つてテキストから顔を上げたが、彼女は至極真面目な顔していた。私はそれには答えず英単語帳を純香に渡し、「おい、なんか問題出せ。あと今度アイス奢れ……」

私がそこまで喋つたとき、またあの重低音が聞こえた。純香が身体を強張らせ、私の腕をきつく握つた。青い空を銀色の双発機がすすめていく。梅雨が明けたところから、プロシア軍は東北地方の空軍・陸軍基地の無血占領を開始した。北海道を完全に占拠しており、日本軍が抵抗すれば北海道の都市に無差別爆撃を加えるというので、全くなす術がない。

「小さいのが一機だけやわ……」　私がそう言つても、純香は固く眼を閉じたままだった。エンジン音が小さくなっていくと、彼女はようやくと汗ばんだ手を離した。「あたしあの音嫌い……」
それは誰でもあまりいい気持ちはしないだろうと思つたが、彼女

を顔を見て、口に出すのをやめた。

「なんで俺が奢らないかんの……」

私と純香は入江を見下ろす高台の公園のベンチに座ってジュースを飲んでいた。夕暮れの海風が心地よく頬を撫でていく。夕風の海を眺めながら、私はふと以前にもこんなことがあったことを思い出していた。私がまだ小学生の5年か6年の夏ごろ、智香と純香を連れてこの町の探検に出かけた。しかしまだ幼い私たちは道に迷ってしまい、泣きだす純香を奮い立たせながらようやくこの公園に辿り着いた。そこで私はなけなしの200円で二人にジュースを買ってやったのだ。あのときも夕風の海だった。もう遙か遠い昔の話だ。

「喉乾いたんやでしょうがないやん。なっちゃんも疲れたやろ？」

純香の声で我に返った私はそれには答えず、「飲んだら行くで」とだけ言い、缶をゴミ箱に放り投げた。純香も「はいはい。つれん人やね」と言つて、私の自転車の後ろにまたがる。

「そういえば『つれない』って古文ではどういう意味なん？」

純香がいたずらっぽい笑みを浮かべながら私の顔を覗き込んだ。

「『冷淡である』」私が即答すると、「チッ」とつまらなさそうに舌を打ち、私の腰に捕まった。あの時は半べそをかいていたのに、大した成長っぷりである。彼女のふくよかな胸が背中に当たり、私は少しだけ、自分は恵まれているのだろうかと考えた。

「ねえ」

なだらかな坂道を下り切ったところでまた純香が口を開いた。あとは小さな漁港沿いを20分ほど走れば家に着く。

「……今度の休み、あんた暇？ 息抜きがてらどっか行かん？ 湯いた潮風を長いこと浴びていたからなのか、純香が幾分掠れた声で言った。

「おお、いいよ。さすがにこっちも勉強ばつかだと息が詰まるわ。ちーちゃんにも……」

「あ、姉ちゃんは用事あるらしいでさ……、二人で……」

そのとき夕風が終わって最初の潮風が私たちの顔を直撃したので、彼女の言葉尻を聞き取ることはできなかったが、私の背中を掴む彼女の手の力が少し増したように思えた。

開け放した窓から、潮の香りを孕んだ心地よい夜風が流れ込んできた。この街で暮らしていると、自分の記憶にある限り潮の匂いを嗅がない日はなかった。梅雨時の潮風は苛立ちを助長させるが、それでもこの風を厭わしく思ったことはなかった。ベッドに寝転んだまま夜空を見上げると、カシオペアが見えた。いささか夜風を肌寒く感じ、高村純香は窓を少し閉める。涼波夏乃に送りかけていたメーイルを消去し、携帯を部屋のクッション目がけて放った。

小さい間取りのマンションながらも、姉の智香と別々の部屋を与えられているのがありがたかった。純香は先ほどよりかは幾分見える範囲が狭くなった夜空を見上げる。カシオペア座は何億年も前からあの光を放ち続けているんだなあ、と思うと、ありきたりな感想だが、自分がとても無力で小さい存在に思えた。

夏乃のことを意識し始めたのはどれくらい前だったろうか。小さい頃、海が見える公園で姉と彼の自分の3人で沈んでゆく夕日を見ながらジュースを飲んでいたときからだろうか。純香は今でもあのときのことを思い出す。自分があちこちへ夏乃と智香を連れ回し、結果的に道に迷ってしまった。今考えてもよく帰れたものだ。幼い自分には、夕日を一種のタイムリミットのように感じていた。夏乃はもうあんな昔のことを覚えてはいないだろう。今日の夜風もあの日の潮風と同じ匂いがする。そう思うと純香は無性に懐かしくなり、玄関の外に出てみた。立ち入り禁止の柵を乗り越え、屋上への階段を上る。夏乃がいた。座り込んで望遠鏡のようなもので空を覗いていた。「夏乃！」 純香は驚いて声を上げた。彼も少し目を大きくした。

「な、なにしてるん？」 純香がおずおずと夏乃に近づく。

「今日はよう星が見えるわ」 夏乃が相好を崩し、望遠鏡を覗き込む。その顔があまりに少年のころの彼に似通っていたので、純香はどきりとした。彼が覗き込んでいるのはやはり天体望遠鏡のようだった。

「あんたも見る？」

夏乃が腰をずらし、場所を譲った。純香は言われるままに望遠鏡を覗きこむ。微かに白い靄がかかったようなものが見える。

「オリオン座の三つ星の下にあるオリオン大星雲や。ピント合わすの苦労したわ」

「ふーん・・・」 夏乃が星が好きだとは知らなかった。純香は望遠鏡から目を離して胡坐をかく。「食べる？」と夏乃が差し出したきたポテトチップスの袋に手を突っ込んだ。

「しかしあんたが星見るのが好きやったとはなあ、意外やわ」

菓子を口に詰め込みながら言う、「小学生のころから好きやったけどなあ」と彼は少し遠い眼をして呟いた。

「そうなん？ 全然知らなかったわ」

「屋上でしか望遠鏡覗かんからな」

「なっちゃん、向かいのマンション覗いたりしたらんやろね？」

純香はにやけながら夏乃に尋ねた。夏乃は鼻で笑い、「そんなアホなことせんわ」と純香の頭を小突いた。「上下左右逆転したもん見てもなんにも面白くないよ」

「いつてえな。結局見てんじゃねーか」 純香は袋に入っていたわずかな菓子を鷺掴みにして口に放り込む。「おい、仮にも女子なんだからそんなみつともないことをするな。あと菓子食った手で望遠鏡触るなよ」

「仮にもつてなんだよ」と彼の脛をつねっていると、視界の端に一際明るい灯を放っている場所があった。海の方角、南勢工廠だ。5月に爆撃を受けて修復中だが、まだプロシアに占領はされていない。その灯を見て、彼女は少し気分が沈み込むのを自覚したので、夏乃の方に向き直ったが、言い様のない小さな不安は首をもたげた

ままであった。

夏乃がピントを合わせたオリオン大星雲は、自転により、とうの昔に視野から外れてしまっていた。

秋

10月になると朝晩はだいぶ冷え込むようになってきた。ケーニヒスベルクは同じ10月になると雪が降り始める。それに比べればこの日本の方がいくらか過ごしやすいが、真夏の蒸し暑さには参った。

滑走路の向こうは澄んだ海が広がっていた。反射した夕焼けと夕闇が混ざり合っていて、なんとも風情のある色合いを醸し出していた。この飛行場から見える景色が、フランス・アドラーは好きだった。偵察飛行のときに見える複雑に入り組んだリアス式海岸は、幼いころに両親に連れられて旅行したスペインのガリシア地方の美しい風景を彼に思い起こさせた。観光旅行で来るなら、この国も悪くないかもしれない。フランスは操縦桿を握りながら、そんなことを考えていた。

「本当に日本軍の反撃がなんでしょうか？」

だから後ろの機銃座に座っているフェリックスの叫び声で我に返った。操縦しているのは中型の二人乗り単発戦闘機なので、声を張り上げないとエンジン音にかき消されてしまう。

数十分前、今日の偵察飛行を終え、夕食をとろうと食堂へ向かっていた彼らは緊急出撃の命を受けた。リーダーが数十の正体不明の飛翔体をとらえたのだそうだ。他の乗員たちも自分たちの機に飛び乗り、西へ向けて飛び去っていった。基地は重爆撃機を残し、戦闘機のほとんどがスクランブル発進した。といっても前線から外れたこの基地には、もともと十機ほどの戦闘機しか駐機されていなかった。

「わからん！」 フランスは後ろに向かって怒鳴り返し、機首をどんどん上げていった。亜庭島を占拠してから反撃らしい反撃は受けていないが、日本の航空基地はほとんど爆撃で破壊したはずだった。

高度800メートルに達しようというとき、薄暮の空にいくつかの黒い点が見えた。やがてそれらはみるみる増殖していき、フランスとフェリックスの眼前に迫ったと思うと、翼の下部から閃光をほとばしらせた。フランスは思い切り操縦桿を上について回避する。数十メートル横を飛んでいた僚機の右翼が付根から吹き飛び、真っ黒い煙を吐きながら落ちていった。

「機銃じゃない、バルカン砲だ！」

フランスが後ろの機銃座に向かって叫んだ。敵機の真上を掠めたときに、深緑色の主翼に赤い丸が見えた。日本軍機、それも双発の大型戦闘機だった。フェリックスが機銃を下に向けると同時に、すぐ近くで大雨が屋根を打つような渴いた音が聞こえた。途端に機体の制御が利かなくなる。

「尾翼に被弾！」

フェリックスが上げた声は悲鳴に近かった。さらに突っ込んで来た戦闘機からバルカン砲が浴びせられ、機体下部が火を吹く。フランスは胸の内ですらと娘、そして後席のフェリックスに詫言した。一呼吸置いて、彼らの機体は火だるまになって四散した。

「やばいな……」

私は第3回マーク模試の結果を見ながら一人ごちた。初秋のさわやかな風が開け放った窓から入ってきて、頬を撫でる。丘の上に立つ学校の廊下から、刈入れの終わった田んぼが見渡せた。

第一志望は依然としてE判定だ。それも模試の回数を経るごとに偏差値はさがってきていた。マーク模試だからまだ偏差値50は保っているものの。記述模試などは45と50の間をうろつろしている体たらくだ。

第一志望の自己推薦に出してみたが、高校時代なにもやっていな

い私が受かるとは到底思えない。一般入試で勝負するしかないだろう。ほぼ合格が確約されている指定校推薦は評定が足りず出願できない。私は自分の愚かさを呪った。3年生前期の評定平均なら4弱はあるだろう。

折しも今日は指定校出願者の願書が受理されるか否かが判明する日だった。願書が受理されればそれは事実上の合格となる。橋倉くんが肩の荷が下りたようなすっきりした顔で教室から出てきた。

「どうだった？」 待ち構えていた藤谷や枅岡くんが満を持して彼に迫る。

「通った！」 橋倉くんは嬉しそうに答えた。私たちは歓喜の声を上げ、彼を労う。廊下には歓声が溢れ、泣いている女子もいた。受験方法はどうあれ、これも彼らの努力の賜物に違いない。私は思わずもらい泣きしそうになった。

昼下がりの教室はとても心地がいい。私は窓べりに顎を載せて英語帳を眺めていた。英語の成績は上がるどころか、急激な下降を開始した。英語ができなければ受からない。長文読解のセンスが皆無なので、がむしゃらに単語を覚える作戦を昨日思いつき早速実行に移していた。

次は移動教室でなので隣のクラスの一部の生徒が私のクラスへ移動してくる。そろそろ自分も移動しようかと席を立つと、後ろの机に人だかりができていた。座っているのは隣のクラスの女子だ。確か杉田とかいったらどうか。彼女は指定校ではなく、AO推薦で第一志望である関西の名門に受かったと和紀から聞いた。彼女が友人数名と一緒に見ているのはヨーロッパ旅行のパンフレットだった。

それを見た瞬間、私はいいようなない怒りと同時に悲しみを感じた。なぜ自分は好きな旅行を我慢してこんなつらい勉強をしているのだろう。同時進行している日本とプロシアの戦争がそれに重なった。プロシアも推薦入試も大嫌いだ。こんなくだらないことで腹を立てる自分も嫌いだった。私はずっとこの女と推薦入試を憎み続け

るだろう。なんの確証もなく、そんなことを思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0634f/>

東京銀世界

2010年11月15日00時51分発行